

曾野綾子

春の飛行

曾野綾子

贈
寄
小
沢
正
雄
氏

毎日新聞社

春の飛行

定価 七〇〇円

一九七四年四月二十日 印刷
一九七四年四月三十日 発行

著者 曾野綾子

編集人 浜田琉司

発行人 朝居正彦

発行所 毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋
〒545 大阪市北区堂島上
〒812 北九州市小倉北区紺屋町
〒460 名古屋市中村区堀内町

印刷 精文堂
製本 大口製本

春 の 飛 行

深水夫人、千代は歯科医の大島氏の治療台の上で、義歯の型をとってもらっていた。

診療室は、清潔な陽の当る部屋なので、春のこの頃の気候では、決して不愉快ではないのだが、いずれにせよ、医者と名のつくものにかかってあまり心たのしいことはない。しかし夫人は、今もうどうしても義歯を作らなければならないところまで追いつめられていた。夫が亡くなったのは四年前である。深水氏は東都製罐株式会社の常務であったが、没後、税務署と財産税の交渉をして、三人の子供たちとどの程度の生活を続けて行けるものか、目やすがつくまでは、大変な心労であった。

歯もその頃から悪くなりかけていたのだが、歯医者通いをするほどの時間とお金の余裕がなかった。やっと決心してこうして治療を受けに来た時は、もう大分悪くなっていたらしく、もともと少ない歯を、更に大島氏に三、四本も抜かれてしまった。

大島氏は、齒を抜くことと、話をする事がひどく好きな人間である。

「来週はこれで仮齒が入ると思います。そうすれば物も噛めるしずっとよくなりますよ」

「ありがとうございます」

夫人はうがいをしてから言った。

「食事といえば、卵や豆腐やどんぶばかりで、本当にいい加減いやになってしまいました」

「そうでしょう。年をとって来ますと、食べることはかりが楽しみですからな。私も年々こう腹がせり出して来て困るんですが、肉や油ものを食わんという訳には行きませんでなあ」

大島氏はちょっと診察室のほうを覗いた。患者が来ていないことを見確かめると、

「奥さん、今日はお急ぎですか？」

「いいえ」

「実はちょっとお話ししたいことがございましたな。家内がいるといいんだが、生憎ちょっと出かけてますが、まあ、私でもよくわかることなんで」

「さようでございますか」

深水夫人は訝しげな調子だったが、大島氏はかまわず、

「下の応接間のほうにいらっしゃって頂きましょうかな」

と独り言のように呟き、

「用事があったら、呼んでくれ」

と看護婦に言い置いて、自分から先に立って階段を下りて行った。

席が決ると、大島氏は何気なく、

「実は一昨日、奥さんがおいで下さった時にお話されていた、一番上のお嬢さんのことですがね」
「滋子いけのことでございますか？」

「ええ、実は、大変に適當ではないかと思う青年がおりましてね。私はこんな風にあけすけな人間なもんだから、先方にちょっと話してみたんですよ。そうしたら、是非お会いしてみたいと、こういうのでね」

深水夫人は黙って頭をさげた。

長女の滋子は今年もう三十になっていた。夫の亡くなる頃から、今年こそいい縁を見つけて、と思っていたうちに瞬く間に四年の年月が経たってしまった。三人の子供の中で、夫人の心に重いのはこの娘である。本人はおとなしい、内側でがっしりと考えてあまり表に感情の波をあらわさないような性格で、これでもう八年も明和火災海上保険会社に勤めている。婚期におくれている、ヒステリーをおこしたり、やけになって男友達を持ったりすることもないだけに、夫人は不憫びんでたまらないのであった。

いい縁談があると言われた時にも、すぐとびついて行く気にならないのは、最近あちらこちら

から持って来られた話が、どれも見合にまで行く迄もなくことわる事になってしまったので、いくらかおっかなびっくりになっているようなところがある。縁談がなければ、娘もいよいよ世の中から置き去りにされたかと、胸がしめつけられるほど淋しい癖に、縁談ときくと、どうせろくな話ではないだろうと思ってしまうこの頃であった。

しかしそんなことでは親としての任務も果せない。深水夫人がためらいながら相手について尋ねたところによると……

お嬢さんというのは、上村丈太郎かみむらじょうたろうといい、今年三十四になる東大教養学部きやうがくぶの経済の助教授である。大島氏は、丈太郎の父の上村三吉と親しかったので、子供の時から丈太郎を知っていた訳だが、

「奥さん、この親父というのは、東大の農学部のうがくぶの教授でして、頭はよかったが、いくらか変人でしたかね。ムスコのほうは美男子で、才気はあるし、大学でも重んじられているし、実に釣合いのとれた人間なんですよ。親父のほうが昨年死んで、うちには母親ひとりが残ってますがね。これも、丈太郎君の姉さんあねという人が結婚して実家の母親と一緒に住んでるもんだから、丈太郎君のほうは、まあ同居しなくてもいいことになっている。きょうだいはこの姉一人です」

「まあ、大変けっこうなお話でございますけど、世の中にはいいお嬢さんも多くていらっしやい

ましように、何もわざわざうちの滋子のような者を……」

「それは私もきいてみたですよ。三十四まで結婚しないっていうには、何か理由がありそうですね。ところが、彼は、女が信頼出来なくなっただな。あんまり惚れられるんで。この頃の女子学生はひどいそうですよ。昔、私らが女にしたようなことを逆に男にやってるんだな。先生を待ち伏せしたり、喫茶店へ連れこんだり」

深水夫人は、思わず微笑した。

「奥さんはお笑いになるけど、彼はほとほといやになっただけで言ってみましたよ。家へ帰ってみれば上って待っているのまでいるんだそう。それから、日に二回ずつ速達の手紙をよこしたりしてね。奥さん、それというのも、彼は背が高いですしね、将来性はあるし、収入の点だって、大学の給料の他に雑誌に書いたり、本も出したり、翻訳もしたり、八メン六ピの活躍だから、女の子が争奪戦をやらすのは当たり前ですが」

「この頃はそんなんでございましょうか。私も娘もうすばんやりしておりますが」

「まあ、全部が全部そういう訳ではないだろうが、昔のように恥ずかしがるなんてことは考えられませんからね。ともかく、そういう状態でいれば、丈太郎君が結婚のチャンスを失うのも当たり前だと私は思いましたね。しかし奥さん、やはり男っていうものは、余程グズでもない限り、女にモーションをかけられたからって、なびくもんじゃない。むしろ効果は逆ですよ。だから丈太

郎君にしてみれば、滋子さんのような方こそ望ましい訳だ」

「さよでございましょうか」

「それでまあ、一応形式だけですが、履歴書と写真をおついでの際に、お持ち頂けましたら、先方も大変喜ぶと思うんです」

「はあ、勿論そうさせて……」

と言いかけてから、夫人は思いなおしたように、

「実は、やはりこの御近所の方で、長いこと娘のことを考えていて下さいました方がございましたら、お預けしてあつた写真と履歴書を返して頂いて来たところなのでございますが」

「と、そこに持っていращやるといふ訳ですな」

「はあ」

「それは幸運だ」

深水夫人は、ハンドバッグから、端のいたんだ写真と、何人もの手から手へと渡つた^{あづく}挙句にすっかりけば立ってしまったらしい履歴書の紙をとり出した。三十になつたとはいへ、清らかな娘のままにいる滋子なのに、夫人は写真のいたみ方をみると、娘自身が、他人から他人へとさらしものになつたやうで淋しかった。

写真 は 木綿の夏服でとった素人写真だった。滋子は目も鼻も日本風に細く、どここといって人と人をひきつける魅力もない代り、考え深げな好ましい表情をしていると思つてゐる夫人は、大島氏がちらとそれを見たりで、何もほめようとしなが、何となく物足りなかつた。大島氏は更に事務的に履歴書のほうも拵けて見た。

「そうそうお嬢さんは、どこかの御養女になつていらつしやる訳だから、春名^{はるな}滋子さん、とお苗字も變つていられる訳ですな」

「はあ、春名と申しますのは、私の実家^{きと}なんでございます」

「すると、大變立ち入つたことで失礼ですが、財産のほうもおつぎになつた訳で？」

「は、子供たちの中では、あの子にだけ、少々まとまつたものがございまして」

「それは、おしあわせだ」

深水夫人は、しかし、又しても心の中を、或る不安の影が通りすぎて行くのを感じた。

深水夫人は一人娘だったので、結婚後第一子に実家の姓をつがせることを、夫に承諾してもらつた。夫人の父母は滋子を養女にすると、財産には贈与税を払つて、そつくり孫に残して行つたのである。世田谷のほうの土地・建物などの不動産を含めると、かなりのものがあるのだが、これが、今となつてはどうも滋子の運命に荷厄介になつてゐるように思われるのであつた。

それに、滋子は、勤めて八年目になっているので、会社の月給も一人前の男と比べて少しもひけをとらない程度になっている。今まであったいくつかの縁談の中にも、明らかに金めあてと思われるものが多かった。本人がとりたてて美人でもなく、しかも三十にもなっているとすると、敢えてそうした縁談にのろうという男には、不純なコンタンがあるうとしか思えない。いや、事実、男らしい男は、財産つきの女などには手を出したがない。こちらにしても、どんなに婚期を失しかけているとはいえ、景品つきで結婚の相手を、いや「雄」を探すなどということは、到底、夫人の誇りが許さない。

この上は、あるがままの滋子を素直に、太らかに愛してくれる青年が出て来てくれ、と夫人は祈るばかりであった。

そんな夫人の思いには一向おかまいなく、大島氏は、丹念に履歴書に目を通して、

「ほう、下のお嬢さんの慧子^{けいこ}さんももう大学二年生。お坊ちゃん^{ひろし}の寛君は、国立東京第五病院内科勤務」

「はあ、昨年、やっと慶応のほうでインターンをおえまして」

「そうですか。第五病院っていうのはいい病院ですよ。私はあその歯科部長と学生時代からの親友で、今でもよく遊びに行くし、レントゲン科にも産婦人科にも親しい知合いがおりますよ」
「さよでいらっしますか」

夫人はそれから、ちょっと話題をかえて、

「先生はもう随分、今までにおまとめいらっしゃいますよね」

「縁談ですか。いやあ」

と大島氏は額に手をあてて愉快そうに笑ってから、

「今の私の楽しみの一つだね。いい御縁が決った時ほど、愉快になれるものはない。それと私の楽しみはカメラでしてね」

「それはそれは」

「今日は、私は大変嬉しいニュースをもらいましてね、上機嫌なところです。私の写真が新聞社のコンクールに入賞しましたよ」

「どのお作品でいらっしゃるのですの？」

夫人はきよろきよろとあたりを見廻した。どこかの壁にでもかけてないだろうかと思ったからである。

「いや、現物はまだ審査を受けたままで返してもらっていませんがね。そうそう、奥さんに一つお見せしてもいいものがある」

大島氏は急いで部屋を出て行ったが、やがてハトロン紙の袋を持って引き返してきた。

「私は今、望遠レンズに凝^こってましてね。いつも肌身はなさず持って歩いてます。先日も、それ、

その第五病院へ夕方出かけましてね。ちょっといい写真がとれたです。病院の窓辺にいる若い男と女の抱き合ったところですがね。夕陽を逆光線に受けて、なかなかいい。もっともまだ引き伸ばしてないけれど」

医師は丹念に、封を破いてから、大切そうにハガキ大の写真を夫人の前に差し出した。

夫人は覗きこんで見ていたが思わず叫び声をあげた。

「あ、これは！」

「どうかされましたか」

大島氏も、夫人の様子に慌てた。

「お恥ずかしゅうございますが、ここに写っているのは私どもの息子の寛でございます」

「そうですか、それはそれは、ふうむ」

大島氏は当惑の極に達していた。

「いやな子でございますねえ」

逆光線なのでこまかい表情は見えなかったが、勿体ぶった顔をした寛と女の鼻と鼻との距離はあまりにも近すぎるように夫人は思った。

「先生、この写真を頂戴できますでしょうか。こらしめのために、家に持ってかえって詰問してやりませんか。本当にみっともない」

「それは勿論お持ち下さってかまいませんが。ふうむ」

大島氏はあまりのことに、言葉を失ってもう一度唖^{うな}った。

2

がらりと戸をひきあけて、

「只今、母さん只今」

と、息せき切って寛^{ひろし}が家に帰って来たのは、夜も十時近くになっていた。夫人は、滋子^{しげこ}と、茶の間でひっそりと縫物をしていたが、例の写真の問題が何となく腹立たしかったので、黙っていた。すると、

「母上、寛^{かん}が只今戻りました」

と、親の心も知らず友達とビールでも飲んで来たのか、甚だ上機嫌である。カンというのは寛のアダナで、家の者も友達も皆カンちゃん、と呼んでいる。

玄関の脇の自分の部屋で本を読んでいたらしい妹の慧子^{けいこ}が首を出して、

「やかましいわねえ。もう少しもの静かに帰って来たら」と注意すると、

「門限に遅れそうだから急いだんだよ」

とまだ息を切らしている。男の子でも門限は一応十時ということになっていた。もっとも守られなくても一向に問題にならない門限だが。

茶の間に入って来た寛に、お帰りなさい、と言ったのは姉の滋子のほうだけである。

「おそくなりました」

「寛、ちょっとここへお坐りなさい」

深水夫人は改まった。

「この写真をごらん」

寛はしげしげと、映画俳優のプロマイドでも見るように、問題の写真に見入った。

「ふうむ、僕の横顔も、こうして見るとなかなかいいなあ」

「ばかなことを！ お母さんは今日恥かきましたよ。大島先生が、望遠レンズで写した傑作が出来たっていつて見せて下さったのが、この写真じゃないの」

「ふうん、恐ろしい世の中になったな」

夫人は黙っていた。

「この望遠レンズって奴は、明らかに人権ジュウリンですよ」

「お母さんなんか、どこからどんな風にとられたって、別に恥ずかしいようなことはしていません」